



第4ブロック研究部

No. 5

令和7年度 研究主題

遊びの中の学びを探る

研究園

五条 真田山 味原 大江 生魂 鶴橋

常盤 長吉 長吉第二 瓜破北 加美北

第5回研究部会

令和8年3月4日（水）

15:30～17:00

長吉第二幼稚園

1年間の研究について、パワーポイントを使って報告を行い、各園の今年度の取組や成果、今後に向けてなどについて討議しました。

- 遊びの中の学びとは何かを探る中で、幼児なりに考えて工夫する姿が学びではないかと考えた。
- 実践記録を取ることで、教師自身が幼児の姿を振り返る機会になり、次の保育への課題などが見えてくることも多かった。結果ではなく過程が大切と改めて感じた。
- 幼児が思う存分遊びを楽しむことが、学びにつながるのではないかと。
- 今までの実践記録の形式にとらわれず、新たな記録の取り方を工夫したことで、教職員間で研究について、深く考える機会を多くもつことができた。
- 認知的・非認知的な学びについて、小学校の先生も含めた情報共有が大切だと感じた。
- 幼児が主体的に行動する中で学びが生まれることが分かった。
- 保護者啓発において、これまでは遊びの中の学びについて伝えることが難しかったが、研究を進めていくことで、具体的な言葉で学びを伝えることができるようになった。
- 次年度の研究でも、幼児の興味関心から遊びを探っていくようにしたい。



『遊びの中の学びを探る』

部会参加者に1年間の研究を漢字一文字で表すと何になるかアンケートを取ると、その結果は学、探、遊など様々であった。5月当初と比べると子どもの姿を捉えられるようになったという肯定的な意見が増え、研究の成果を感じることができた。

1. 研究集録について

学びがどんなものか可視化され、具体的な姿が出てきていて分かりやすかった。学びを枠組みにすると、『思考と探究』『協働と共有』『葛藤と解決』などに分けられる。学びの要因をカテゴライズすると、『空間と時間の保障』『素材の特性』『用具へのアクセス』『知的好奇心へのサポート』などに分けられる。その土台となるのが、教師の存在（信頼・受け止め）、友達からの刺激などで、いかに環境が大切かということが分かる。

2. 砂場で遊ぶ3歳児の姿から

砂場で水を流そうとしても流れないので何度も試して遊んでいる。その姿から『物理現象への気付き』『役割分担と合意形成』『感覚の心地よさと没入感』を読みとった。読みとるためには、子どもの行動と背景、子どもの視点の尊重、そして教職員間の連携が大切である。複数の教職員で話し合い、捉え方の違いを受け止めることで、共通理解を深めることができる。

3. 幼小接続について

1年生の不登校者数は10年前と比べて8倍ほど増えている。幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図るうえでも、スタートカリキュラムが重要である。幼稚園では無自覚だった気付きが自覚され、今まで経験してきたことが知識としてつながって小学校の学びになる。幼稚園での遊びの中の学びがとても大切である。

～講話から学んだこと～

- 学びの要因は様々にあるが、主体的に遊ぶ中で学びが生まれることを学び、子どもの興味関心に寄り添い、夢中になって遊べる環境をつくるのが大切であると分かった。
- 砂場で同じように遊ぶ子どもでも、その子どもによって感じている楽しさや気付きは違うので、それぞれの思いを尊重しながら保育していく大切さを学んだ。
- 小学校教育のスタートカリキュラムでは、幼稚園で親しんできた遊びを踏まえた授業づくりがされていることを知った。遊びや体験を通して学習しているため、ゼロからのスタートではないことを幼稚園側も理解した上で、連携を深めていく必要性を学んだ。

